

書評 「BCG 流病院経営戦略」

評者:川淵孝一(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科医療経済学分野教授)

医療機関経営の入門書として最適! BCGらしい現場感あふれる分析アプローチで、明日から使える手引書になっている

本書は、ボストンコンサルティンググループ(BCG)が日本赤十字社の赤十字病院の協力の下、DPC(Diagnosis Procedure Combination:診断群分類包括評価)関連データを分析して得た知見がベースになっている。DPC 関連データとは、脳卒中・急性心筋梗塞の重症度やがんの進行度を示す患者データに、当該治療にかかった医療費や診療内容・結果を加えた個票データをいう。

私が主宰する東京医科歯科大学医療経済学分野でも「病院可視化ネットワーク」と称して同種の研究を行っているが、プロの経営コンサルティングのレベルにはとても及ばない。さすが BCG だ。まさに本書は病院の経営改善に取り組んでいるマネジメント層のみならず、政策担当者、さらには広くヘルスケア産業に携っている医療関係者必読の書といえる。

特筆すべきは従前、わが国の医療界で常識とされてきた仮説を全面否定している点だ。例えば、在院日数を削減すると病院利用率が下がるとか、医療の質が低下するとされてきたが、「こうした仮説は迷信だ」とデータ分析でばっさりきる。

また、薬剤費や診療材料費といった変動費の削減は高固定費ビジネスたる医業では通用せず、むしろ収益拡大や医療の標準化の必要性を訴える。

さらに本書は、一病院の経営改革に留まらず、(X 県における)地域医療再編計画、ひいては医薬品・医療機器産業に対する政策提言にまで論が広がる。

折角なので X 県庁を訪問し、事前に承諾を得た医療機関については具体的な病院名も入れて筆者らと考察した分析結果を説明したが、呆れかえったのは、「川淵さんの熱い思いはよく分かったが、こうした病院再編計画は誰が実行するのか」という行政担当者からのピンボケ質問。旅費もこちら持ちで帰路は大変空しかったが、これが今の地方の実態かもしれない。

しかし、本書の最終章にある通り「バリューベース・ヘルスケア」は世界の潮流となっている。望むらくは「医療の質」を加味した病院経営改革がわが国にも上陸することを期待したい。